

ルナとテラ

(過去と未来の真ん中物語)

著作.. 劇団麦の会

(上演予定時間 15分)

出演

ルナ (たぶん17歳)

テラ (たぶん17歳)

ルナとテラは舞台の端まで歩き、戻る。2〜3回、行ったり来たり。周りに誰もいないことを確認

テラ 「よし、誰もいないよな」

ルナ 「(客席を見て)・・・」

テラ 「どうかしたか？」

ルナ 「・・・なんだか」

テラ 「・・・」

ルナ 「・・・視線をいっぱい感じる」

テラ 「・・・」

ルナ 「(客席を指して) とくにこの辺・・・」

テラ 「気のせいだよ」

ルナ 「そうかなあ・・・」

テラ 「ああ、気にすんな。それより、本当にこの木の下なんだな」

ルナ 「うん、間違いない」

テラ 「よし。で、何処を掘ればいい？」

小さいシャベル、又は木の枝で土を掘る。
掘り出したのは、瓶。

ルナ 「あつた！（喜びの叫び）」

テラ、ルナから瓶を受け取る

テラ 「これか？」

テラが、空に向かってかざすと中に手紙
ルナは、メモ帳に、何か書いている。

テラ 「おい、ルナ」

ルナ 「え？ああ、ごめん、書かないと忘れちゃうから」

テラ 「ああ、いいんだ、それよりこれは？」

ルナ 「たぶん・・・」

テラ 「何？」

ルナ 「手紙」

テラ 「なんでわかる？」

ルナ 「僕の記憶に残ってるんだ」

テラ 「手紙が？」

ルナ 「僕は、80分しか記憶が残らない」

テラ 「知ってるさ、さつき聞いた。だからいつもメモ帳を持ってる」

ルナ 「いつからだろう、時間の流れ・・・それがわからない」

テラ 「でも、昔の記憶はあるんだろう？」

ルナ 「あれは15歳の僕の記憶」

テラ 「15歳・・・」
ルナ 「そう、(客席を指して)そこに、木の枝と葉っぱが重なり合ったトンネルがあるだろう」
テラ 「ああ」
ルナ 「そこをくぐり抜けてから」
テラ 「今しか生きられなくなったんだな」
ルナ 「どうして知ってる？」
テラ 「さっき聞いたじゃないか・・・って、もう80分経ったか」
ルナ 「それからどうなったのか、まるで分らないんだ。こま切れ記憶の・・・記憶の綱渡りさ」

ルナは、手帳を見ながら、考え込む。

テラ 「で、この手紙に何が書かれているんだい？」
ルナ 「それが思い出せないんだ」
テラ 「昔の記憶は消えないんだろう？」
ルナ 「忘れちまった遠い記憶だってある」
テラ 「君が書いたんだろう」
ルナ 「たぶん」
テラ 「たぶんかよ」
ルナ 「もしかしたら、自分・・・」
テラ 「自分が？」

ルナ 「自分に当てた」
テラ 「タイムカプセルかよ」
ルナ 「未来に伝えたい何か・・・」
テラ 「まずは手紙を読まなきゃ始まらないって」
ルナ 「ねえ、僕と君は、いつ知り合ったんだっけ？」

メモ帳をめくるが書いてないのか、見つからない。

テラ 「さつきさ」
ルナ 「さつき？」
テラ 「ルナがこの森で手紙を掘り出す、ちょうど145分3秒前」
ルナ 「ずいぶん細かいな」
テラ 「僕はこの、ソラレの森を探していたんだ」
ルナ 「君が？」
テラ 「そして、ルナもこの、ソラレの森を探していたんだ」

ルナ、メモ帳を見ながら。

ルナ 「そうか・・・僕の記憶が・・・15歳の、僕の記憶が話しかけたんだ」
テラ 「誰に？」
ルナ 「僕にさ」

テラ 「自分が自分に？」

ルナ 「ソラレの森公園の大きな木の下」

テラ 「ここを・・・掘れって？」

ルナ 「そう、そしてこれは、僕の記憶の道しるべ」

テラ 「だったら、早く開けて読んでみようよ」

ルナ 「(唐突に)・・・君は正直者かい？」

テラ 「なんだ、藪から棒に」

ルナ 「僕がすぐ忘れるからって、何か隠してないか？」

テラ 「そんなことないさ」

ルナ 「この木の前で嘘はつけないぞ」

テラ 「なんだそれ？そう言う、ルナはどうなんだ？」

ルナ 「僕？」

テラ 「君は、隠し事はないか？」

ルナ 「僕のことには気にするな」

テラ 「気にするなって？もしかして読むのが怖いんだろ (からかう)」

ルナ 「違う！」

テラ 「何が違う」

ルナ 「君はご飯を食べるだろ？」

テラ 「ああ」

ルナ 「で、食べてもまた、しばらくするとお腹は減る」

テラ 「ああ」

ルナ 「どうせ減るなら、食べなきゃいいじゃないか」

テラ 「食べなきゃ死んじゃうだろ」

ルナ 「そうだよね」

テラ 「うん」

ルナ 「だから、君の秘密も聞かせてくれないか」

テラ 「わからない、その理屈がわからない」

ルナ 「食べる、と、聞く、を入れ替えてみて」

テラ 「聞かなきゃ死んじゃう？」

ルナ 「そう、聞いては忘れ、忘れては聞いているの繰り返し」

テラ 「食べては出して、出しては食べての繰り返しってことか」

ルナ 「汚いなあ」

テラ 「お前が、入れ替えてみるって言ったんだろ」

ルナ 「ただ、君のことが聞きたいだけさ、バカ！」

フンツ！と、舞台から退場するルナ

テラ 「おい、何処へ行くのかルナさん」

ルナ 「ちよっと、出してくる」(そう言っ、退場)

テラ 「出すって？おい、ほんとに出すのかよ」

ルナを追いかけてテラも退場

再び登場する二人。

テラ 「なあ、出すもん出して身軽になったところで、いいかげん、読もうぜその手紙」

ルナ 「これは僕の手紙だ。君のじゃない」

テラ 「でも、もしかしたら」

ルナ 「もしかしたら？」

テラ 「僕にも関係が、あるかもしれない」

ルナ 「それは、ない」

テラ 「どうして言い切る？」

ルナ 「君と僕は、145分3秒前に会ったばかりだ」

テラ 「記憶力良いな」

ルナ 「さっき君が言ったばかりじゃないか。まだ、3分しか経ってないからね」

テラ 「カップラーメンじゃないってんだ」

ルナ 「3分は偉大だよ」

テラ 「あのさ・・・」

ルナ 「ウルトラマンは3分で敵を倒し」

テラ 「僕は・・・」

ルナ 「キューピーは3分で料理を作る」

テラ 「僕は昔の記憶が・・・」
ルナ 「記憶に残るスピーチは3分が基本」
テラ 「記憶が無いんだ！」
ルナ 「・・・なんだった？」
テラ 「僕は、15歳までの記憶が無いんだ」
ルナ 「それって」
テラ 「ルナと逆さ」
ルナ 「・・・」
テラ 「君は15歳・・・からの記憶が無いんだろ？」
ルナ 「・・・」
テラ 「僕は15歳・・・までの記憶が無いんだ」

ルナ、手帳にメモを取りながらつぶやく

ルナ 「テラ、15歳で記憶喪失・・・」
テラ 「おい、メモを取らない約束だろう」
ルナ 「忘れた」
テラ 「まだ3分しか経ってない」
ルナ 「細かいこと気にするな。それよりその時、君はどこにいた？」
テラ 「気が付いた時、この木の下に」

ルナ

「この木？」

テラ

「あとは分からない。だから過去を、知りたい気持ちが一瞬強いな」

「偶然過ぎるね・・・やっぱりこの木が導いたのか」

ルナ、木を抱くように右耳をつける

ルナ

「ほら、こうすると聞こえる」

ルナと同じように左耳をつけるテラ

テラ

「何が聞こえるって？」

ルナ

「しい・・・静かに・・・ほら、土の中から・・・水を吸い上げる音」

「・・・」

ルナ

「ちゆる・・・ちゆるる・・・ちゆる・・・って」

「・・・あ！・・・」

テラ

「聞こえるだろう」

「ほんとうだ」

ルナ

「生きているのさ」

「そりゃあそうさ」

ルナ

「生きているという事は、何かを知っているという事なんだ」

「もしもし、ルナさん？」

ルナ 「なんだい、テラくん」

テラ 「木だぜ、これ。ただの木。樹齡何年の木だかは知らないけれど・・・」

ルナ 「君は、想像したことがあるかい」

テラ 「何を？」

ルナ 「この木の根はどこまで続いているんだろうって」

テラ 「根っこ？」

ルナ 「そう、根っこ」

テラ 「どこまでって、まあ（木の根の先端だろうと思われるところまで歩いて）・・・こんくらい」

ルナ 「どうしてそう言い切れる」

テラ 「だって、こんなもんだろ。この木を支えるには」

ルナ 「君は、目に見えるものしか信じらない人だろ」

テラ 「いや、目に見えないことは信じない」

ルナ 「同じことだ」

テラ 「違うだろ」

ルナ 「どこが」

テラ 「見えないものを信じないことは、見えることしか信じないことにはならない」

ルナ 「・・・同じだ」

テラ 「いや違う！見えることも、疑うってことさ！」

ルナ 「・・・ムキになるなよ」

テラ 「なってるない」

ルナ 「だから」
テラ 「だから？」
ルナ 「根っこさ」
テラ 「根っこ？」
ルナ 「掘り出すと、根っこの長さには限りがある・・・」
テラ 「ああ」
ルナ 「・・・ように見えるが、本当は分からない」
テラ 「あるさ、無限じゃない」
ルナ 「見えないだけで、人間の目には見えないだけで、細（ほそ）い根が」
テラ 「見えない細い根？」
ルナ 「僕たちの下を、地中をずっと、ずっと長く延び」
テラ 「あのね」
ルナ 「延びた先で、他の木の根っことからみ合い、ネットワークを形成して全地球をカバーしている」
テラ 「まるでインターネットだな」
ルナ 「シナプスさ」
テラ 「シナプスってなに？」
ルナ 「脳みその細胞をつなぐ回路」
テラ 「細胞をつなぐ」
ルナ 「そう、そして、この木は脳みそを作るひとつの細胞なんだ」
テラ 「ちよっと待って、君の話は分かったが、君が何を言いたいのかが、分からない」

ルナ 「だから、すべてを知られているんだ」

テラ 「この木に？」

ルナ 「うん・・・」

会話をしながら、瓶から手紙を取り出し、広げるルナ。

テラ 「お、いよいよ開くか、その手紙」

ルナ 「君のためじゃない。僕自身のために」

テラ 「君のため、巡り巡って僕のため」

ルナ 「うるさい。だまれ！」

テラ 「・・・」

ルナ、テラから離れ、手紙を読み始める

ルナ 「君が生まれし時、もうひとつの君も生まれ・・・」

テラは、一緒に、手紙の内容をそらんじ始める。ルナとテラの言葉が重なる。

ルナ・テラ 「君とは異なる歩み続ける。上も下も、右も左もなく、ただグルグルと・・・」

気づいてテラを見るルナ、テラは構わず続けてそらんじている。

テラ 「『グルグルと繰り返し続ける中で、ただそこにあるという事が唯一の真実なり。西へ行け。』」
ルナ 「おい、テラ・・・(何故、内容を知っている?)」
テラ 「失った記憶の、記憶の暗闇の中にポツンとひとつだけ光るものがあつたんだ」
ルナ 「それが?」
テラ 「この手紙・・・今わかった」
ルナ 「どういうことだ」
テラ 「僕が書いたらしい・・・」
ルナ 「僕には埋めた記憶だけが残っていた・・・(考え込むルナ)」
テラ 「謎だな」
ルナ 「西へ行くと何がある」
テラ 「それがわかりやあ苦労はない」
ルナ 「じゃあ・・・とりあえず、西へ行くか」
テラ 「西って言うことは・・・」
ルナ・テラ 「こっち」(ルナは上手、テラは下手を指す)
テラ 「あれ? さつきこつちが西側じゃなかったっけ?」
ルナ 「細かいこと言うな、君が書いたという手紙にあつたじゃないか、上も下も、右も左もない」
テラ 「何故そんなことを書いたのか、謎ですが」
ルナ 「この世は全て謎だらけ」
テラ 「ルナさん、その謎は、解けるのでしょうか?」

ルナ 「解けない謎はない！」
テラ 「頼もしいね」
ルナ 「と、言いたいところだけど、行ってみなけりやわからない」
テラ 「(ガク・・・)なんだよ」
ルナ 「謎に悩んで立ち止まるより、前に進めば何かが光る」
テラ 「前に進む、その前に、腹減った・・・」
ルナ 「腹が減っては何とやら・・・うち来るか」
テラ 「お前、ひとりで家に帰れるのか」
ルナ 「まかせとけ、地図を書いてある」

手帳を見ながら退場する二人。大地を思わせる音楽と共に暗転。

終わり